

アイヌの世界観

クマとオルゴールメリー

旭川市博物館

アイヌの人びとのカムイ（神）

アイヌの人びとにとってカムイ（神）とは、「人間にない力をもったものすべて」を指します。動物や植物といった生き物だけでなく、山や川、風や太陽、さらには病気や飢饉のような災いさえも、精神をもつカムイと考えられています。かれらはそれぞれの「カムイの国」に人間の姿をして住んでいますが、鳥や獣といったよそいきの衣装を身につけて「人間の国」にやってきます。人間はカムイがいないと毛皮や肉を手に入れることができませんが、カムイもまた人間がいないと酒や幣といった宝やごちそうを手に入れることができません。カムイは、人間からこうしたものを捧げてもらうほど豊かな生活を送り、カムイの仲間でも株を上げることができるので、これらのもので自分を丁寧に祀ってくれる人間のところにやってくるのです（中川1997）。

カムイの魂を送る

そのためアイヌの人びとは、狩りを獲物を「殺す」「捕る」ものではなく、もてなしを受けたいため人前に姿をあらわすカムイを「受け取りに行く」「迎えに行く」ものと考えます。大事な神ですから、訪問してくれたことに対する感謝を捧げ、供物をささげて魂を神の国に戻してやります。この儀式をアイヌ語でイオマンテ（カムイホプニレ）といいます（アイヌ民族博物館編1993）。

魂を神の国に送り届ける儀礼は動物だけに限りません。祭りや生活の道具などの「もの」が役割を終えたとき、その「もの」の魂もまた、儀式をおこなって神の国に送り返しました。このような「もの」の送りをイワクテといいます。小動物や鳥などの送りもイワクテという場合があります（宇田川1980）。

送られたクマとオルゴールメリー

昭和43年（1968）、嵐山の岩陰で確認された現代の上川アイヌの送り場には、花矢や家紋を刻んだ椀といったアイヌの伝統的な道具類のほか、酒ビンや缶（1961年製）、クマ・イタチ・リス・タヌキ・ウサギなどの鳥獣骨が入ったビニール袋4点とともに、乳児用のオルゴールメリーの部品が置かれていました。思い出の多いオモチャもまた神の国に送り返されていたのでしょうか。いずれにしても、この送り場は、アイヌの人びとの世界観が現代にも脈々と受け継がれていることを物語っています。上川アイヌは、嵐山のこのような送り場を「イワクテ」の跡と呼んでいました（故杉村満さんから聞き取り）。

展示は、この嵐山の送り場に着想を得て、イオマンテのクマとオルゴールメリーを配し、アイヌの人びとの世界観・生命に対する想いを象徴的に演出しました（展示物はいずれも嵐山の出土資料ではありません）。展示のタイトルは、現代の私たちの世界観からは失われかけている「もの」に対する感謝を強調するため、また嵐山のイワクテの跡にちなむものであることから、「イワクテ」としました。

参考文献

- アイヌ民族博物館編 1993『アイヌ文化の基礎知識』草風館
- 宇田川洋 1980『アイヌ考古学』教育社歴史新書
- 中川 裕 1997『アイヌの物語世界』平凡社ライブラリー